線射放

海外への緊急医療援助や在日外国人に対する医療などにかかわってきたためか、ボランティア活動というと、私の頭には「国際」という言葉がどうしてもちらついてしまう。

私の小学四年の息子と三年の娘は、地域の小学生軟式野球チームに入っている。チームの監督・コーチは保護者の有志で、仕事の合間を縫って土曜日や休日などに子供たちの面倒をみている。

気が向いた時に練習に参加するのは簡単だが、監督・コーチのようにチームを育成する義務を担っている人たちになると、なかなか大変だ。総監督さんに至っては、チーム創設以来十二年間指導を続けておられ、今も自らノックを飛ばし、試合には引率したりと、決してお飾り的存在ではない。

地域活動

皆さんはすべて無給。最近気が付いたのだが、これはもうりっぱなボランティア、地域への貢献だ。

日本のボランティア活動の歴史は浅いと言われるが、内外の緊急救援活動ではなく、野球チームの指導や自治会といった地域密着型の活動は、日本の隅々にまで長い歴史とともに根をはっている。

総監督も監督もコーチも、心底野球が好きで「好きだからボランティア」というわけだ。この人たちと語らっていると、仕事を離れても自分を必要としている人がいることに、おのおのが価値観を見いだしていることがよくわかる。

自分は社会のために役だっている。それが、その人の生き生きとした目に現れている。

これから迎える高齢化社会。社会のどこに自分の居場所を見つけていくかが問題だ。それは何歳になっても自分が社会に必要とされていることの確認作業であり、生きがいを探す旅でもある。

さまざまな地域密着型のボランティア活動へのかかわり、も、人間としての尊厳を失わずに生き抜いていくためのキーワードになると思うのだ。

（小林　米幸＝AMDA・アジア医師連絡協議会日本副代表）